

林京子と上海

——共生／加害の記憶——

プロジェクトメンバー：篠崎美生子、渡辺祐子、洪潔清

本プロジェクトの目的は、林京子のテキストのうち上海を舞台としたものを、現地での実地調査を手がかりに分析し、共生／加害の記憶がどのように織り交ぜられているかを明らかにすることにあつた。1931年生まれのエは、父の赴任地である上海で1歳から14歳までを過ごしたのち、1945年の帰国直後に長崎で被爆しているが、被爆とその後の人生にかかわる小説の陰惨さに比べ、上海を舞台としたものの多くは幸福感に満ちている。

ただし、上海での少女時代を中国人との幸福な「共生」として語ることは、侵略者としての上海滞在、すなわち「加害」を隠蔽することにもなりかねない。エは『上海／ミッシェルの口紅』（講談社文芸文庫、2001）のあとがきで、それらの短編集が「ありのままに子供の目で」書かれたものであるとうたってはいるが、上海を舞台としたエの小説を、作家の記憶、または事実として承認するのではなく、あくまで戦略的な表象と仮定し、その内実を分析することが必要であるとの考えから、我々は研究をスタートさせた。

はじめは、林京子研究で知られるフェリス女学院大学の島村輝氏が主宰する読書会に参加し、資料とつぎ合わせながら『ミッシェルの口紅』（1980）を再読する中で、「ありのまま」とは言えない事象をいくつか小説の中に発見することができた。ただし、それを上海における現地調査で確認する計画を立てているさなかに、コロナ禍により海外出張が難しくなってしまった。

そこで代わりに行ったのが、オンライン講演会（2021.3.1 科研費研究プロジェクト「1910～1930年代の文化メディアにおける日中相互表象の形成と展開」（18K00297 代表者：篠崎）との共催）である。島村輝氏の講演「上海をめぐる三つの透視図―「著述業」者・林京子の移動視点―」は、上海を舞台にした小説集『ミッシェルの口紅』『上海』（1983）及び長編『予定時間』（1998）を通じ、エがいかにして小説の中に事実らしさを構築していったかを明らかにするとともに、「私小説」として以外の解釈可能性をひらいてみせるものであつた。コメンテーターの秦剛氏（北京外国語大学）はこれを受け、とくに『予定時間』を「スパイ小説」として読む可能性を強調、映画のカメラワークとの関連も示唆した。また、『予定時間』に、当時は日中両国でまだ十分に注目されていなかった芥川龍之介『支那遊記』（1925）が批評的に織り込まれていることを評価した。

この講演会には、中国、アメリカ、日本から計75名が参加し、その後の討論も非常に有意義なものとなったため、講演、コメント、討論に小論を加え、これも上記科研費プロジェクトとの共同で報告書を作成した。また、講演会に中国からの参加者が多かったこと、中国人研究者のエ京子への関心が高いことを踏まえ、本学非常勤講師朱海燕氏の協力を得て報告書の中国語版も作成した。

なお、報告書の巻末に収めた「「林京子」をつくった「芥川」と「魯迅」」で述べたように、上海を舞台としたエの小説群には、事実らしさの構築ばかりでなく、「林京子」像の巧みなプロデュースを見ることがもきる。「芥川」を、たくましい近代中国に理解のない「文人」と断じ、それへの距離を語る一方、中華人民共和国で今日に至るまで「革命的」とも評価される「魯迅」との、生理的なまでの近さを強調する手法がそれである。

上海を舞台とした林の小説の中には、「加害」の記憶、もしくは中国人から「加害」者として目されていることを自覚する箇所も、ないわけではない。こうした箇所は、当時の中国人との「共生」の幸福を回想する小説の中で、ノイズとして読者に認識される。しかし、かつては「加害」者（の子供）であっても、「芥川」を否定し「魯迅」に寄り添う姿勢を示すことで、「林京子」は現代中国との和解の担い手になることができているのかもしれない。この件については、コロナ禍が去ったのち、別の機会に上海での調査を進め、より精密な立論を期したいと考えている。

このたびは、当初の予定に従って上海における現地調査を行うことができなかったが、旅費を報告書の作成に充てることをお許しいただいたおかげで、日中両国語の報告書を完成させることができた。付属研究所の皆様には、改めて御礼申し上げたい。